

茅ヶ崎グランドプラン (A) 交通ネットワーク方針 (案)、(B) 景観方針 (案) について、片岡の考えを以下まとめました。

(A) 交通ネットワーク方針について

1. クレジットが入れられるのならば、日付の上に「GP 推進会議」と入れたほうがよい
2. 開けた1頁からあまりに単調すぎて、リーダビリティが低いと思います。私の **premise** (前提) を入れてみてはいかがでしょうか？
3. 以下は各頁への補追です。
  - P11 3本の道路を強調したアップ (高橋氏アイデア参照) が欲しい。
  - P14 ○基本コンセプトに従い…の項の V1 こども、老人に配慮した<優先性>を確保
  - P16 (8) 道路に関係する事業者への働きかけ (東電、NTT, (各インフラ業者)、水道局、警察等とのコラボ)
  - P29 夏期専用のシャトルバス。関東圏対象にウェザーリポート付の HP 設定。

## Premise(前提)

「交通」と呼ばずに「道」と呼んでみてはどうか。

こと茅ヶ崎にあっては、国道をのぞいて、人と人、街と街、コトとモノを結ぶものは「道」と呼びたい。道は文化であり、地域生活の動脈である。

「道」を交通という概念でとらえ、ネットワークという一義的な側面で処理することは、＜経済＞への隷属を意味する。

茅ヶ崎という「文化イメージ」の結晶した地域には、住む人、訪れる人の道のルールがあつていい。それは古くは道(ドウ)と呼ばれたタオイズムのメタファーにも繋がる。

こうした発想のコンセプトを基底に置くと、にわかに茅ヶ崎海岸地区の、＜理想のあり方＞が見えてくる。

昔から、人々が集まり、祈り、歌う行為は、ヨーロッパに見る如く、道の結節点である広場(パテオ)で行われた。茅ヶ崎においては、それは サザンビーチから連なる海岸である。

サザン通りや雄三通りを、さらにイメージアップし、100メートルごとに小さな道の守り神を置くほどに発想を変えれば、20分の歩く時間は、新しい「街の価値」を発見する旅となる。茅ヶ崎にあっては、「道」は、文明ではなく、文化である。一＜交通ネットワーク＞という、味も、素っ気もないタイトルを払拭することから、この方針案を膨らませて考えたい。

## (B) 景観方針について

日付の上にクレジット「グランドプラン推進会議」と入れる。

はじめの頁に premise を入れる。

P7 ④の研究体制——地元に着した景観研究の体制を確保、大学、研究機関と連携システムを構築(⑤とは別に)

3) 色彩の基本的考え方

P8 市の建築課の方針(ガイドライン)が紹介されているのでは。

P9 キーワードの項、各キーワードごとに斜線を入れて目立たせる。

P16 統一性を壊し、バランスを著しく崩す家屋デザインの建築許可基準の明確化

P18 海岸地域景観ゾーン

① ※全体的に抽象的？

追加＝全周的な充実感に包まれた公園発想

② なぎさベルト

追加＝サーファーや遊覧船など海からの特色ある眺め

P20 景観形成の基本方針

○ 砂浜の電柱や B 地区の落書きなど、猥雑な風景の整理

## Premise(前提)

そもそも「景観」とは何か。

金田一京助の国語辞典によれば、「景観」とは、「見るだけの価値のある、特色ある風景」とされている。さらに漢和大辞典によれば、「景観」の景の字は、「日光によって生じた明暗のけじめ」であり、大きい、めでたいという意味をも包含している。

「景観」とは、雄大で、心からありがたいと思う見え方が根底になければならないことになる。

景観基本計画が、茅ヶ崎に敷行されたのは、平成 10 年。その基本的な考え方は、①快適な環境都市づくりの標榜②茅ヶ崎らしさの魅力の創造③市民参加のまちづくりの増進となっている。

渦中の海岸地区改造計画にあって、「景観」は、最も重要なテーマとなる。法規や、産業が優先して、結果としての「景観」が残る発想は、60 年代の忘れ物と言われる。

たとえば、景観と密接に関係する「観光」という価値観を見ると(イ)景色だけを見ること(60 年代～70 年代)から、(ロ)景色に囲まれて何をするか(70 年代～80 年代)を問う時代、そして(ハ)21 世紀にあって観光は、自分にとって<存在>を問いかける時空にまで昇華されて解釈されている。こうした時代観をビジョンとして取り込みながら茅ヶ崎海岸は独自のランドスケープを構想したい。茅ヶ崎は、関東有数の、イメージ都市である。茅ヶ崎の景観計画が最優先事項として扱われるために、グランドプランは、さらに具体案を検証していく必要があると考える。